

野生鳥獣対策としての生態系管理に資する通信インフラ

Telecommunications Infrastructure for Ecosystem Management against Wildlife

堀川 洋子*
(HORIKAWA Yoko)

溝口 勝**
(MIZOGUCHI Masaru)

I. はじめに

長野県軽井沢町は町の広大な部分が鳥獣保護区や特定銃猟禁止区域に設定されているため、クマ追い払い犬のベアドッグを活用するなど生態系との共存を基本とする野生鳥獣対策に努めている。本稿では、NPO 法人ピッキオ（以下、ピッキオ）が主催する「クマと人との共存に向けた取り組みを学ぶスタディツアー」への参加および軽井沢町環境課野生鳥獣対策係への訪問ヒアリングに基づき、野生鳥獣対策について考察する。

10 II. 生態系をモニタリングすることの重要性

ヒアリングで最も印象に残った話題は「餌のドングリが豊作になるとツキノワグマの出生率が上がり、翌年の出没が増えると言われている」ことである。長野県のブログでも同様の話題にふれている¹⁾。クマの餌が豊富にあることはよいことだと考えていたが、子グマが増えて、かつ淘汰がおこななければ個体数は急激に増える。正しい生態系の知識を持つことの重要性を考えさせられた。同時に、通信インフラを使った生態系や気候変動に関するモニタリングや分析を行えば、クマの個体数予測や行動把握につながる可能性が期待できるのではないかと考える。

III. 通信インフラとベアドッグ

ピッキオは軽井沢町の委託を受け、クマに電波発信器を装着し行動を追跡し、被害を出す可能性が高いクマとそうでないクマを識別することで、有効な対策につなげている。人の居住エリアに近づくクマを罾で捕獲して電波発信器を取りつけ、森に戻す。このとき、人やベアドッグの大声、ゴム弾などで威嚇しながら放獣することで「人や犬は怖い」とクマに覚えさせる（学習放獣）。その後、警戒ラインに再び近づいたクマはベアドッグに吠え付かれて追い払われる。発信器を装着していないクマは目撃情報と巡回で対応する。

電波発信機を用いた調査は、特に行動範囲が広いオスグマの行動把握に役立ち、オスグマが季節によって異なる環境を利用していることなどが明らかになった。

* 法政大学

** 東京大学

電波発信器はバッテリーの寿命が課題である。現在、クマに ID タグを装着して、バッテリーの充電や交換が容易である固定の受信器を要所に設置して、クマが近づくと反応するシステムが検討されている。長年の観察でクマの行動を把握しているため、受信機の設置場所や台数を経済合理的に決定することができる。

IV. 電気柵

大都市近郊にある別荘地でありながら農業・農村地域の側面を有する軽井沢町には、地場の農産物や料理、加工食品等を求める来訪者が少なくない。

農産物の野生鳥獣対策は観光業にも大きな影響を及ぼす。町は「有害鳥獣被害防除用施設設置補助金」により、町単独で農業者等に対し電気柵の設置に要する資材経費の一部を補助している。ピッキオでは、電気柵の購入を検討している個人を対象に、その効果を実感してもらうため電気柵の貸し出しを行っている。電気柵購入後は、正しく設置できているかどうか、町役場職員による現地確認が行われ、柵の設置効果が最大になるよう留意されている。

55 V. 住民参加とベアドッグ

クマ対策には住民の参加が欠かせない。軽井沢町ではクマを誘引しないためのゴミ対策や藪刈払いなどを住民と行政が協力して行っている。住民が協力する動機の一つにベアドッグの存在が考えられる。巡回など一途に仕事をしているベアドッグを見ると、自分たちもできることをしようと思う。クマ等の野生鳥獣への恐怖心というネガティブな感情ではなく、犬との交流によって野生鳥獣対策にポジティブな感情を持てることは、地域への訪問や居住に対してプラスの効果をもたらすといえる。

謝辞 本稿の執筆にあたり、長野県軽井沢町環境課野生鳥獣対策係、NPO 法人ピッキオにご教示とご支援を賜りました。記して謝意を表します。

参考文献 1) ほっと 9 (ナイン) ながの : <https://blog.naga70no-ken.jp/nagachi/nature/45587.html>, 2023.09.06

キーワード 生態系, 鳥獣保護区, 特定銃猟禁止区域, ベアドッグ



軽井沢の野生鳥獣対策の風景

堀川洋子（法政大学） 溝口勝（東京大学）

撮影：堀川